

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：82619

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720364

研究課題名(和文)浅鉢形土器の型式学的検討を通じた縄文社会構造の研究

研究課題名(英文)study of jomon social structure through model biological study of asabachi shallow pot earthenware

研究代表者

井出 浩正 (IDE, Hiromasa)

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・研究員

研究者番号：20434235

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は東日本域の縄文時代中期の浅鉢形土器(以下浅鉢と略記)を分析対象とし、浅鉢の時系列・分布の整理と具体的機能の特定、地域集団間の交渉史の解明を目的とした。研究の際には、(1)浅鉢のデジタルデータ作成、(2)浅鉢の法量計測と肉眼観察、(3)浅鉢と深鉢の比較による両者の社会的機能差の抽出というサブテーマに分けて進めた。

その結果、縄文時代中期(阿玉台式期)においては、浅鉢の口径と器高が正の比例関係にあること、用途や使用場面にある程度対応する浅鉢の作り分けが存在したこと、有文浅鉢と無文浅鉢は、それぞれの系統的な連続性が存在し、独自の作り分けが存在したことが想定される等の諸成果が得られた。

研究成果の概要(英文)：This study was analyzed Asabachi shallow pot earthenware of Jomon period mid-East region, organization of time series, distribution of Asabachi and certain specific functions, and the elucidation of the negotiating history of the inter-regional group. At the time of study, (1) digital data creation of the Asabachi, (2) Asabachi of law amount measurement and the naked eye observation, (3) extraction of social function difference between Asabachi and Fukabachi. As a result, in the middle Jomon period (Atamadai types), that caliber and vessel sales of Asabachi is in the positive proportional relationship, that separate formation of Asahachi to some extent corresponding to the application and use scene exists, decoration Asahbchi and plain coarse Asabachi are present each of systematic continuity, gave various results, such as to be assumed that their own separate formation was present.

研究分野：考古学

キーワード：縄文時代 縄文土器 浅鉢 深鉢 社会構造 集団間交渉 阿玉台式 中期

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 対象研究の時代背景

本研究が対象とする縄文時代は、世界史的に見ると新石器段階に区分され、狩猟採集活動を生業の基盤とする文化に位置づけられる。特に本研究が着目する縄文時代中期は、紀元前 3000 年から同 2000 年の約 1000 年間であるが、当該期は最終氷期後の緩やかな温暖化を経た気候安定期に該当する。これまでの埋蔵文化財発掘調査事例によれば、縄文時代を通じて最も調査件数ならびに出土資料の蓄積があり、特に住居跡と集落跡の検出数は他の時期の数倍の検出数に上るといふ特徴がある。

その原因は、安定的な気候環境に伴う各種の生業活動の発達や、根菜類の原始的な栽培の存在、そして地域集団間の密接なネットワークの構築による社会の安定化が背景にあると考えられている。また、社会の安定化は各地で極めて装飾性の強い土器群や立体的な土偶等の造形物を生み出し、定着性の高い大規模な拠点集落が出現し、宗教的儀礼を含む様々な祭祀活動によって社会の複雑化が進んだものと解釈されている。

### (2) 研究着想の背景

これまで縄文時代研究の中心は、出土土器の型式学的検討による編年とその編年に基づく集落跡の時間軸上の動態把握に重点が置かれてきた。土器編年には、主に煮沸用具である深鉢形土器(以下深鉢と略記)に施された文様や文様パターンの分析が主体的に進められ、現段階では AMS 放射性炭素年代較正值と齟齬のない細かな時間軸が確立されている。

しかしながら、これまで時間軸の整備を重視するあまり、地域社会の交渉やその社会構造の復元に至る具体的なモデルの構築に多くの課題が残されている。特に社会が複雑化する過程において、社会の構成員やその集団、集団関係の相互を結びつける社会構造が不可欠と考えられるが、これまでの研究には、そうした前提や具体的な考古事例や考古資料を用いた検証によるモデルの提示が不十分であった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、これまで着目されずにいる東日本域の縄文時代中期の浅鉢形土器(以下浅鉢と略記)を分析対象とし、浅鉢の時系列・分布の整理と具体的機能の特定から、地域集団間の交渉史とその実態を明らかにすることにある。特に、「大型浅鉢」や「彩色浅鉢」の供膳具および供献具としての役割に注目し、浅鉢を通じて地域社会がどのように結びついていたか、縄文時代の社会構造を探る新たな方法論を提示する。

そのため考古学上吟味された時間軸上に裏付けされた場(集落遺跡)と道具(出土遺物)を用いつつ、これまでほとんど注目され

なかった新たな資料群を積極的に分析対象として活用し、社会構造の観点から議論を更に深めてゆくことが重要であると考えた。

## 3. 研究の方法

(1) 浅鉢のデジタルデータ作成、(2) 浅鉢の法量計測と肉眼観察、(3) 浅鉢と深鉢の比較による両者の社会的機能差の抽出という3つのサブテーマに分けて進めた。研究の進捗から(1)(2)(3)と段階的に進むこととしたが、進捗状況によって各段階を併行させた。

### (1) データベース作成

データベース作成は、発掘調査報告書等の文献調査と複写、デジタルデータ化の二つの手順で進めた。は東日本域の縄文時代中期集落跡出土の浅鉢に関する型式学的情報の把握、は発掘調査事例に基づく出土状況の分析による浅鉢の使用場面の類型化を目的とする。

は集落跡を含む遺跡出土の完形ないし略完形(大形破片含む)の浅鉢を対象とした。主な対象地域は関東地方(東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県、群馬県、栃木県、茨城県)中部・北陸・南東北地方(長野県、山梨県、新潟県、福島県)である。既に過去の研究実績において既に基本情報を得ている対象地(東京都、千葉県、埼玉県、栃木県、茨城県、福島県、長野県)においては情報の再チェックと更新を行い、未着手の対象地については、大学図書館、国会図書館、各地方自治体が所管する図書館等で文献調査と複写等の集創作業を行った。

は、を経て収集した資料をスキャニングによってデジタル化し、画像・情報検索ソフトによるデジタルデータベース化を行った。そのデータはパーソナルコンピュータに入力・内蔵させ、各地の資料調査の際に調査資料の類例検索が可能となるなど、浅鉢の法量計測と肉眼観察において重要な分析補助ツールとなった。

### (2) 浅鉢の法量計測と肉眼観察

資料調査(法量計測:口径・胴部最大径・底径・器高と容量計算、肉眼観察による被熱痕跡および彩色の調査、写真撮影と図化作業(実測・デジタルトレース)を行った。は法量計測に基づく浅鉢の容量変化と器形変化の相関関係の解明、被熱痕跡の確認と浅鉢の機能特定、は彩色浅鉢の施文技法と彩色行為の把握を目的とするものである。

(1)のデータベース化作業によって、遺存状態が良好(完形もしくは略完形)かつ、肉眼観察が可能である資料を選択し、資料調査を行った。

調査対象は都道府県を単位とする以下の地域とした。平成 24 年度は、千葉県域、東京都、茨城県域、栃木県域、埼玉県域、群馬県域とした。平成 25 年度は東京都内、神奈川

県域、山梨県域、長野県域、新潟県域、福島県域とし、平成26年度にそれらを補完した。

調査手順は資料調査と、データの整理と分析に分けて実施し、概ね からの順に進めた。

#### 資料調査

主に法量計測と肉眼観察、写真撮影と実測が該当する。法量計測では、既存の発掘調査報告書や文献で未記載の項目を中心に、浅鉢の諸属性を計測する。肉眼観察では器面に残された被熱痕跡と彩色を調査する。被熱痕跡は、内面と外面の被熱による二次焼成の確認とスス・コゲ等の煮沸に伴う炭化付着物の有無を主な分析項目とし、また標準土色帖を用いて器面の色調を記録する。被熱痕跡が認められた場合は、被熱箇所と被熱具合の情報を含む実測図を作成する。彩色の確認は、塗布された顔料の遺存状態に注意を払いつつ、内面と外面を観察し付着箇所を検出を行う。彩色が認められた場合は、彩色の種類と彩色による文様表現の抽出が可能か検討し、図化と写真撮影を行う。ただし、彩色が認められない場合も、当時塗布されていた顔料がその後の埋蔵環境や劣化によって消滅した可能性を考慮する必要があるため、内面と外面のミガキ等、器面の調整痕跡の観察を入念に行った。観察を踏まえて、データの整理と分析：浅鉢の容量計算と図化作業（デジタルトレース）を行った。

#### (3) 浅鉢と深鉢の比較による両者の社会的機能差の抽出

、の成果を統合し、浅鉢を通じて地域社会がどのように結びついていたか、地域集団間の交渉史とその実態から縄文時代の社会構造を解明することを目的とする。浅鉢の型式学的分析と法量計測による、浅鉢の時系列上の変遷および画期の整理と、報告書に記載された検出状況等の事実を吟味することによる浅鉢の社会的機能の提示を目的とする。

#### 4. 研究成果

研究成果は、(1) データベース化に該当する文献調査ならびに複写作業を合計27回、(2) 資料調査を10ヶ所、(3) 成果の公開を、論文2件、発表1件、関連する展覧会1件を通じて行うことができた。

##### (1) データベース化

平成24年度は東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県、群馬県、栃木県、茨城県、長野県、新潟県、福島県を対象とする文献調査（主に発掘調査報告書等）の悉皆調査と文献複写作業を12回実施した。

平成25年度においては、前年度に引き続き、東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県・群馬県・栃木県・茨城県・長野県・新潟県・福島県を対象に文献調査（主に発掘調査報告書等）の

悉皆調査と文献複写作業データベース化を10回行った。埼玉県、新潟県、福島県を除く対象地域においてデータベース化を進めることができた。

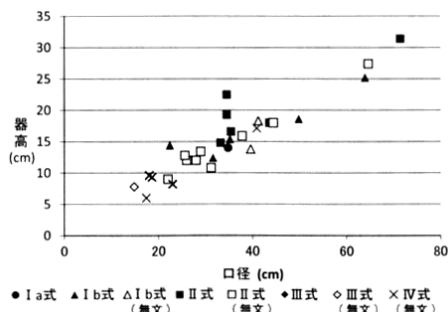
平成26年度は埼玉県、新潟県、福島県、群馬県の一部を対象とする文献調査（主に発掘調査報告書等）の悉皆調査と文献複写作業データベース化を5回行った。これにより研究当初目的とする対象地域の文献調査を終えることができた。

##### (2) 資料調査

平成24年度の早稲田大学會津八一記念博物館所蔵資料において、主に千葉県、茨城県域の資料を対象に行った（平成24年度11月）。

平成25年度は神奈川県平塚市立博物館（平成25年8月）群馬県立歴史博物館（平成25年9月）茨城県立歴史館（平成26年1月実施）長野県茅野市尖石縄文考古館（平成26年2月）において行った。

平成26年度は岩手県盛岡市遺跡の学び館において岩手県内出土資料の資料調査（平成26年9月）（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団（発掘情報館）および（有）毛野考古学研究所において、群馬県内及び茨城県内出土資料の資料調査を実施した。また長野県東信地方出土の縄文時代中期の浅鉢形土器の資料調査を御代田町浅間縄文ミュージアム（平成27年2月）および北相木村考古博物館において行った（平成27年3月）。



第1図

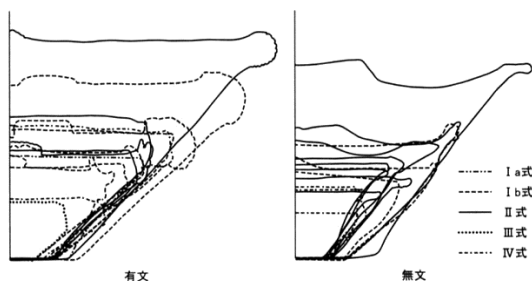
##### (3) 成果の公開

関連分野の研究論文2件、学会発表（月例講演会）1件、関連する展覧会（特集陳列）1件が主な諸成果として挙げられる。これらを通じて本研究の成果を公開した。

このうち、第1図は関東地方の縄文時代中期中葉段階（阿玉台式）の集落跡出土の浅鉢における、口径と器高の相関図である。口径と器高を報告書の記載もしくは報告書の実測図から計測した。第1図をみると、浅鉢の口径と器高が正の比例関係にあることがわかる。これは阿玉台式土器の各段階（a式、b式、式、式、式）の浅鉢が法量において一定の対応関係にあることを示しているといえる。また、各段階のうち、阿玉台b式段階は特定の大きさに集中せず、さまざまな大きさが認められ、用途や使用場面に

ある程度対応する浅鉢の作り分けが存在したことが窺える。阿玉台 式段階になると文様が施された浅鉢（有文浅鉢）と無文の浅鉢（無文浅鉢）にそれぞれにまとまりが存在し、特に無文浅鉢においては口径 30 センチメートル、器高 12 センチメートル前後の個体が多いことが分かる。こうした傾向は口径が約 20 センチメートル、器高が 5～10 センチメートルにまとまりがある阿玉台 式段階にも認められた。このことから、無文浅鉢においては、法量の相関関係にピークが存在し、そうしたピークの背景に何らかの浅鉢の消費の影響が予想される。

一方、今回口径が 50 センチメートルを超え、器高が 25 センチメートルに及ぶ「大形」の浅鉢の存在を抽出することができた。これらの「大形」浅鉢は、現段階では阿玉台 b 式および阿玉台 式段階に認められるものの、数量およびその法量的特徴から極めて特異な存在であることが想定しうる。こうした浅鉢が日常的な場面で用いられたというよりは、むしろ特定の社会環境下で用いられた可能性があるといえる。更なる事例の蓄積の必要がある。



第 2 図

第 2 図は第 1 図で対象とした浅鉢の外形を重ね合わせた図である。第 1 図においては、口径と高さの数的関係であったが、第 2 図をみると阿玉台 a 式、b 式、式、式、式の各段階の有文浅鉢および無文浅鉢の具体的な器形の対応関係があることが分かる。

第 1 図で把握できた比例関係が第 2 図においても反映されているといえる。特に有文の浅鉢は相似に近い形で法量が推移しており、浅鉢の器形そのものの共通性が重視されていたことが推測される。一方、口縁部装飾のうち、有文の浅鉢は隆線による突起や把手にバリエーションが認められ、無文の浅鉢は口縁部形態にバリエーションがあることが分かる。このことから、有文浅鉢と無文浅鉢は、それぞれの系統的な連続性が存在し、独自の作り分けが存在したことが想定されるといえる。

本研究によって、縄文時代中期（阿玉台式期）における有文浅鉢と無文浅鉢の実態を解明する今後の基点を得ることができた。限られた資料の制約の中ではあるが、深鉢を中心とするこれまでの縄文土器研究に、浅鉢という新たな分析対象を加え、かつ具体的に研究

対象として援用する方法を見出すことができたといえる。本研究の対象外の他地域へ範囲を広げ、また縄文時代中期以外の他の時期へ展開することによって、今後さらに浅鉢の具体的な機能の特定へと昇華することが可能になると考える。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 2 件)

井出浩正 2013 「縄文時代中期中葉における浅鉢形土器 - 阿玉台式土器に伴う浅鉢の様相 - 」『史観』(第 168 冊) pp.79-101 査読あり

井出浩正 2012 「長野県内における阿玉台式土器の様相 - 群馬県西部の阿玉台式土器との比較から - 」『長野県考古学会誌』 pp.143-151 査読なし

〔学会発表〕(計 1 件)

井出浩正 「縄文時代のうつわを考える」  
2014 年 11 月 8 日 東京国立博物館月例講演会 東京都台東区

〔その他〕

井上洋一・品川欣也・井出浩正 展覧会  
「縄文土器に飾られた人物と動物」 東京国立博物館 特集陳列 2013 年 7 月 9 日～10 月 27 日実施

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

井出 浩正 (IDE Hiromasa)

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・研究員

研究者番号：20434235

### (2) 研究分担者

なし ( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

なし ( )

研究者番号：

